

令和5年度 園評価書

園番号 25 園名 静岡市立東豊田中央こども園

I 経営の重点に関わること I 経営の重点に関わること 評価段階 (A:よくできている B:概ねできている C:あまりできていない D:できていない)

1 教育・保育目標	2 重点目標	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策 (来年度の具体的な取組目標等)
元気いっぱい 笑顔いっぱい 友達いっぱい	心はずむような「おもしろいこと」をやってみよう	自分の思いや感じたことを、態度や言葉など自分なりの表現で伝えようとする	まずは子どもの思いを受け止め、応答的なやり取りを繰り返すことで、自分のやりたいことや、やって欲しい事を自信をもって伝える姿や、自分の思いを素直に表現する姿が増えた。まだ自己表現が苦手だったり控えめだったりする姿もあるので、今後も子ども一人一人の思いを丁寧に受け止め、安心感をもって自己表現ができるよう支えていく	A	A	・子ども同士で思いが表現し合えているということはすごいことで、大切なこと。 自主性を育てるということは、小学校においても中学校においても大切に考えられている事。幼児にとって、先生という大人を頼って思いや考えを発信することは課題とは捉えなくても良いのではないかと。	・子どもの気持ちを丁寧に受け止め、”わかってくれる人がいる”という安心感を感じながら、自分の思いを表現できるようにする ・保育教諭も子どもと一緒に探求をすることを大事にし、子どもが楽しめるかもと思ったことをすぐ実践する ・異年齢交流について具体的に計画をたて、異年齢と関わって遊ぶ経験、担任以外の保育教諭と関わる経験ができるようにする ・みんなの良さを認め合える振り返りの時間を意識する
		様々なことに興味や関心を持ち、自ら「やってみよう」と挑戦したり「もっと」と探求したりする	とっておき棚の活用や、廃材コーナーの移設など遊びを継続して楽しむことができるよう環境の見直しや再構成を行ったことで、子ども達が物を選んで使う姿や、新しい気づきに出会う姿が生まれた。「もっと」と探求したり「できるまでやってみよう」と挑戦したりする姿がまだ少ないので、保育教諭が「子どものやりたいを引き出す力」を更に高めていきたい	A	A		
		保育者や友達との関わりの中で、相手の思いや考えに触れ、受け入れたり認めたりしながら遊びや生活を進めている	様々な行事や遊びを進める中で、保育教諭が子ども一人一人の思いや考えを伝える橋渡し役をすると、子ども同士で話し合い解決しようとするなど、互いの良さを認め合う姿が増えた。友達を大切に思う気持ちが育っているが、関わりの中で保育教諭に頼る姿もあるので、子どもに育てたいことを職員間でしっかりと確認し、同じ思いをもって関わっていききたい	B	A		

II 各領域に関わること II 各領域に関わること

大項目	中項目	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策 (来年度の具体的な取組目標等)
1 こども園における教育及び保育	(1)0歳から小学校就学前までの一貫した教育及び保育	遊びの中での学びや、これまでの経験を踏まえた環境を用意することで、子どもたちの活動や遊びが展開されている	職員間で発達に合った遊びや環境を確認したり、月案週案で立案した保育内容を子どもの実態に合わせて実践したりした。経験したことや考えたことを活かしながら、その子なりに遊びへ向かう姿が見られた	B	B	・保護者アンケートにおいて、安全に対する項目が、他の項目よりも少し低くなっている。これは、子ども達に災害から身を守るという意識が育っていても、保護者に伝わらないと評価してもらうことが難しい。訓練時様子も撮影するなどして保護者に発信していくことが必要ではないか ・支援の会や支援者会議を計画通りに実施できたことは評価できる。園の職員全員が特別支援に関わっていくということは難しいと思う。今年度の課題を来年度の計画に活かしていけると良い。	・年間を見通したクラス運営案を作成し、活動や行事をどのようににつなげていくか、月案、週日案に具体的に立案していく ・遊びの見取り役として、保育教諭が拠点にいることを意識し、意図をもって見守りや声掛けを行う ・子どもの発達状況や支援方法などについて全職員で共有できるように、会議で話し合い、内容について会議報告を確実に行う。また保護者からの連絡事項などについては必ずメモを取り、伝達漏れなどが起きないようにする ・子どもに玩具の使い方やとっておき方などを伝え、保育教諭も一緒に考えながら遊びを残したり、環境を再構成したりする
		(2)一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	一人一人の育ちや生活状況に考慮し、安心して園生活がおくれるよう、個々の思いや保護者の思いに寄り添った関わりや援助を行っている	A	A		
		(3)環境を通して行う教育及び保育	遊びの展開や継続のための片付け、とっておき方を子どもと考え、遊び出しの環境や興味関心に合わせた環境の再構成を行っている	B	B		
2 安全管理・指導	(1)事故防止・防災	様々な災害を想定した訓練を行い、職員や子どもが自ら行動できるようにすると共に、ヒヤリハットの検証を行い安全対策を行っている	様々な災害、事故を想定した訓練が計画通りに実施され、反省や課題についても会議で議論し周知することができた。ヒヤリハットをまとめ職員に発信することで、春に起きたヒヤリは以後未然に防ぐなど、安全対策を取ることができている	A	A	・研修に短時間勤務の職員を巻き込むというのは、すごく評価できること。園の教育・保育活動に対し、誰でも意見が言えるということは大切。 ・評議委員として研修について評価する際の資料が少ない。園評価書と併せて、研修の取り組みの資料があるとよい。 ・遊びの展開を予測してスピード感をもってというのは難しいこともある。翌日も翌週でも、予測が子どもの遊びにつながっていけばよいのではないかと。 ・築山を作ったことで園庭に高低差ができ、子どもにとって視線の高さが変わるなど魅力的な環境であると思う。	・会議参加の職員だけでなく、全職員で訓練の反省を行う場を作っていく ・ヒヤリハットをすぐ書くことができるよう、ヒヤリハット書き出しコーナーを各クラスに作成する。またヒヤリハットの検証や分析を行ったら、会議や会議報告の場で全職員に周知する ・食育の会に担当以外の職員も参加し、次年度につながる計画立案をする ・保健指導はまず視覚支援での働きかけを行い、成果を見ながら学年に合わせた指導を行う ・ケース会議の年間計画を作成し、職員会議にて話し合いの時間をもてるようにする。また、ケース会議後の子どもの育ちや支援の有効性などについて経過を追っていく ・アンパンマンの会に全職員が関わっていけるようにする
3 保健管理・指導	(1)健康教育の充実	食育活動や保健活動を通して、基本的な生活習慣が身につくよう、経験や発達に合わせた指導を行っている	食材を見る、触る、匂いを嗅ぐ、食べる、栽培するなど毎月、体験型の食育活動を行ったことで、子ども達が食に対する知識を得たり、意欲的に食べたりする姿につながった。食事時のマナーや、手洗い、うがいの習慣、トイレの使い方などはまだ身につけていない子が多いので、今後も丁寧な指導を行っている	A	A		
4 特別支援教育・保育	(1)支援体制づくりの推進	ケース会議を定期的に行い、子どもの育ちや支援方法について職員間で共有することで個に合わせた支援を行っている	担当者会議やアンパンマンの会を継続的に実施し、情報の共有やサポートプランの検討などを行うことができています。ケース会議の回数が少ないこと、支援児の情報を園全体で共有することで個に合わせた支援を行っていること、担当者以外がアンパンマンの会に関わるのが課題なので、今後、園全体で特別支援に関わっていけるようにしたい	B	B		
5 組織運営	(1)組織体制の充実	職員一人一人が園の課題を『自分ごと』と捉えて行動することで、様々な取り組みが円滑に行われ互いに認め合い支え合える風通しの良い職場環境になっている	職員同士で声を掛け合うことが不足したり行事運営に慌てることがあったため、話し合いの機会を増やした。職員同士の関りを深めることで、困った時の支え合いができるようになった。わからないことを声に出し、どの職員も「自分事」として取り組むことができるための、伝達方法や話し合いの工夫の必要性を感じている	B	B	・廃材などを集め子どもが自由に手に取れるようにすることで、製作遊びなどが盛んになり子どもの創造力が広がっている。 ・既存のものだけでない環境で生まれる遊びがあり、廃材や可動の道具などを集めたこと、またそれに保護者を巻き込んだことは良かったと思う。 ・保護者アンケートにおいて、保護者への発信の評価があまり良くなかったように感じる。自己評価はAだが、保護者側の意見として、発信が足りないと感じているのかもしれない。保護者への発信やアンケートの依頼などは、なかなか難しい部分があるが、まずは見てもらえるように何度も知らせるなど工夫していくことが必要。 ・公開保育など案内をもらうが、まだ敷居が高く教員や地域の人が行くことが難しい。公開保育をTOHOコミュニティの活動の中で見に行くなど、地域と子どもが触れ合う機会を作っていけると良い	・学年会議や乳幼児会議を毎月行い、クラス間での情報共有、指導計画の立案、支援方法についての共有を行っていく。話し合いでの決定事項を、園全体に発信することで、互いの遊びや担任の意図を知り、環境作りや行事準備を協力して進めていく ・公開保育で検証した研修の手立ての有効性、子どもの育ちについて園全体へ発信し、以後の実践に活かす ・早番職員もワンチームタイムに参加できるよう会議の持ち方を工夫し、全職員で語り合える体制をつくる ・毎月遊び地図を作成し、必要な教材や道具、コーナーの設置場所などについて園内研修にて決定する。実現に向けて、職員の役割、子どもへの提供の仕方まで具体的に決め、実践につなげていく ・子どもの日々の姿をできるだけ多く写真や記録で残し、タイムリーに教育活動を発信できるようにする ・ドキュメンテーションの園内研修を行い、発信した掲示物をなるべく多くの保護者に見てもらえる工夫をする ・TOHOコミュニティを通して、近隣校、園への働きかけを増やし散歩や学校見学などに出かけ交流を深めていく ・公開授業、保育に職員が行き来し、情報交換をすると共に子ども理解や互いの教育目標についての理解を深めていく
6 研修	(1)研修体制の充実	子ども達が主体的に物事に関わっているよう、職員がワンチームとなって子どもの姿を肯定的に捉え「やってみよう」の思いを支えている	研修に全職員が関わることで、園全体で教育や保育について考えることができるようになり、担任以外の職員も園の一員として教育・保育を担っているという意識と意欲をもつことができています。研修で出した課題を実践につなげることができていないので、研修の学びを以後の保育に活かせるように実践力を高めていきたい	A	A		
7 教育・保育環境整備	(1)教育・保育環境の充実	園庭環境について、月一回話し合いを行い、遊び出しの環境や明日の遊びにつながるような素材、教材、教具の準備ができています	園庭環境を変化させたいという思いから可動の用具を集め赤土の築山を作り、子どものイメージが広がる環境を作ることができた。しかし、保育教諭が子どもの遊びの展開を予想する力が弱く、環境が後出しになってしまうなど教材や素材の研究、準備は不十分であった。職員一人一人がもっと教材研究を行い『遊びにつながる環境作り』を目指していく	B	A		
8 家庭との連携・協力	(1)家庭教育への支援機能の充実	遊びの経過や子どもの姿をドキュメンテーションやお便りで発信し、子どもの育ちや学びについて保護者と共有している	行事の取り組みや日々の遊び、生活の様子を連絡ノートや掲示板、お便りで発信すると共に、送迎時に日中のエピソードなどを保護者に丁寧に伝えることで子どもの育ちを共有している。ドキュメンテーションでの発信が少ないので、日々の姿を写真に収め、行事等に関わらず、いつでも発信ができるようにしていく	A	A	・子どもとの日々の姿をできるだけ多く写真や記録で残し、タイムリーに教育活動を発信できるようにする ・ドキュメンテーションの園内研修を行い、発信した掲示物をなるべく多くの保護者に見てもらえる工夫をする ・TOHOコミュニティを通して、近隣校、園への働きかけを増やし散歩や学校見学などに出かけ交流を深めていく ・公開授業、保育に職員が行き来し、情報交換をすると共に子ども理解や互いの教育目標についての理解を深めていく	
9 近隣の学校との連携	(1)近隣の園との連携の推進	『東豊力』を育む教育・保育活動や年間計画に沿った取り組み、また園や小中学校の職員、園児、児童同士の交流が行われている	近隣校の公開授業や夏季合同研修に参加し、意見交換を行い職員間の交流をもつことができた。中学校とは避難訓練(東豊田中央)やクリスマスカードの交換(東豊田、東豊田中央)などで子ども同士の交流ももてた。小学校の授業参観への参加では、幼児教育の在り方や幼小接続の大切さを振り返る機会となった。今後は小中学校へ訪問して児童、生徒、園児同士の交流がもてる機会を増やし計画的に進めていきたい	B	B		
10 地域との連携	(1)信頼される園づくりの推進	地域資源や人材を活かした行事や活動が行われ、子どもが地域の良さを知り、もの・こと・人に親しみをもって関わっている	地域や園外の人材の力を借りて様々な活動に取り組むことができた。TOHOコミュニティの人材リストを活用しながら地域とのつながりを深めていきたい(東豊田中央)。地域の方との交流を行事のみで終わらせず、子どもからの発信や気づきから4回ほど交流する機会を設けたことで、親しみをもって地域の良さを知ることにつながっている。子どもの体験を通して保護者も地域の良さを感している(東豊田)。	A	A		・まずは職員が地域に出かけ地域を知り、その後子どもと一緒に散歩に出かけ散歩マップを発展させていく ・デイサービスの訪問など、コロナ前の取り組みが復活できるように計画をしていく